

レプリカの仮面のゆくえーバリ島天女の舞の事例から

筑波大学大学院 吉田ゆか子

発表者は、芸能に用いられる「もの」の働きに注目しつつバリ島の芸能を考察している。今回が注目するのは、レプリカの仮面である。模造や複製が可能である点は、仮面の「もの」らしい性質の一つである。

バリ島南部のパヨガン・アグン寺院（以下 P 寺院）には、御神体であり、「天女の舞 (*sang hyang dedari*)」に用いられる、一連の天女の仮面 (*Ratu Bidadari*) と、そのレプリカ（模造品）一式が納められている。本研究では、このレプリカの仮面を、本物と併せて、天女の舞の発展における重要なエージェントと位置づける。レプリカの仮面が纏う曖昧な意味づけとその動態を明らかにし、レプリカが天女の舞に与える作用について考察する。

本来、天女の舞は、寺院の周年祭にて、初潮前の少女達によって踊られる。その仮面は、天の啓示により作られたと伝わる。天女の舞には、希少性や歴史性、芸術的魅力により、特別な価値が置かれている。レプリカの仮面は、1988 年、この舞に芸術祭への出演要請がなされた際に製作された。世俗の芸術祭に、(本物の) 神聖な仮面を用いるべきでない、とする地元民達の意向により代用品が作られたのである。

20 世紀後半のバリでは、観光業の拡大に伴い、どこまで神聖な芸能を観光客に公開しても良いのかその線引きが議論を呼んでいた。そして 1971 年、『舞踊における聖なる芸術と世俗なる芸術のセミナー』が開かれ、舞踊が、神聖な舞踊「ワリ」、儀礼の舞踊「プバリ」、世俗の舞踊「バリバリハン」の三つに分類された。P 寺院の天女の舞は、「ワリ」と分類されたが、州令によって、ワリの舞踊は儀礼以外の場で上演することが禁じられた。興味深いことに、更に 1991 年、神聖な楽器や衣装などを、観光ショーに用いることが禁じられた（梅田 2003 : 88）。これを受け、仮面や衣装や楽器を別に用意し、そちらを観光客用のショーで用いるという対策が、各地で見られた。天女の舞の場合、これに先立ち 1988 年に、「神聖なワリの演目」を「世俗の舞台」で披露するという難問にレプリカを用いて対処していた事になる。先行研究では、天女の舞の神秘性や文化的芸術的重要性が強調され、レプリカには余り注意が払われない。しかし、「真正さ」を特権化し、模造品を取るに足らぬとする研究視角が見落とすのは、レプリカを取り入れて時代の変化に対応し、上演機会を拡大してきた天女の舞の動態であろう。

なお、「儀礼に用いる神聖な本物」と「世俗の舞台用のレプリカ」という役割分担は、実はそれほど単純でもない。2007 年のバリ芸術祭でレプリカの仮面が用いられた際には、本物が近隣寺院の儀礼で上演する時のように、様々な儀礼上の手続きを得て、やっと仮面が寺院から運び出された。上演を観た P 寺院の僧侶は、レプリカの仮面が、本物とほとんど同じであり非常に驚いた、と感想を漏らした。人々は、本物の仮面の方を、Tu Dari Lingsir（年配の天女様）と、そしてレプリカを Tu Dari Alit（子供の天女様）と呼び、両者を親子

のように位置づける。

使用場面の分担も曖昧な面がある。世俗の舞台への出演依頼は、非常に稀である一方、この新しい仮面は、以降、むしろ儀礼の場でより頻繁に用いられている。P 寺院の周年祭で、本物の仮面の舞が上演されない空き時間に、レプリカを用いた舞が行われるのである。一般に仮面とは、しばしばそれを装着し踊るよう人々を動機付ける存在である。長期間しまいこんでおくのは、惜しい、あるいは「可哀想」とあるといった語りは、バリの仮面の芸能実践においてよく聞かれる。この天女の舞のケースも同様である。レプリカを周年祭でも登場させるのには、空き時間を埋めるだけではなく、「子供の天女様」(レプリカ)にも踊る機会を提供するという意図がある。ただし、天女の舞が、P 寺院以外の寺院の周年祭で行われる際には、必ず本物が用いられる。

更に、本物とレプリカの使い分けの認識は、人により異なっている。踊り子達や伴奏音楽の奏者達は、本物とレプリカを見分けるのは容易だと語る。他方、一般の村民達の中には、儀礼の場に登場するのは必ず本物の方であると認識している者や、そもそもレプリカの存在を知らない者達もいる。彼らは、P 寺院の周年祭でのレプリカの仮面による上演を、本物の仮面の上演として眺めているのである。このような態度もしかし、的外れとは言い難い。何故なら現在 P 寺院の僧侶達も、周年祭でのレプリカを用いた上演は、本物を用いた上演と「機能は同じ」と語るからである。

このように、「子供の天女様」は、既に(偽物という含意のある)「レプリカ」という語では呼び難い存在となっている。レプリカとして始まった仮面が、くり返し供物を捧げられ、儀礼に登場する中で、本物と類似の社会的役割を纏っていった事例として扱うことも可能であろう。しかし、収納場所や、上演の文脈等で、人々が注意深く両者を区別する面もある。時に本物のようにあり、文脈によっては本物と決定的に区別される、このレプリカの仮面の曖昧で両義的な性格は、世俗的な場での上演を可能にしなが、その世俗の上演にさえ、神秘的で、神々しい魅力を加えている。

#### 引用文献

梅田英春

2003「バリ舞踊の聖俗論セミナー(1971)の答申をめぐる一考察」『MOUSA』4: 79-92.